

城を歩く会 6月定例会 資料①徳川家康の隠居城＝駿府城

日帰りバスで静岡の名城を歩く

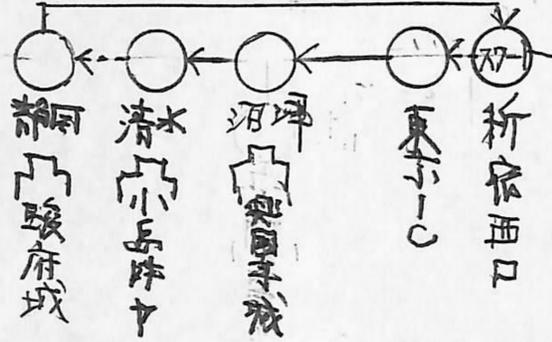
今川氏の居城、家康の隠居城、早雲出世の城を訪ねる

平成25—6—5

山岸弘明

本日の主要スケジュール

- 8時00分 新宿駅西口集合、出発
- 東名高速道、沼津インター
- 10時20分～12時05分 興国寺城
- 東名道、車中昼食、清水インター
- 12時50分～14時10分 小島陣屋
- 一般道、賤機山城遠望
- 15時20分～17時20分 駿府城
- (うち15時40分～16時10分東御門巽櫓入場)
- 17時00分 新宿着、解散



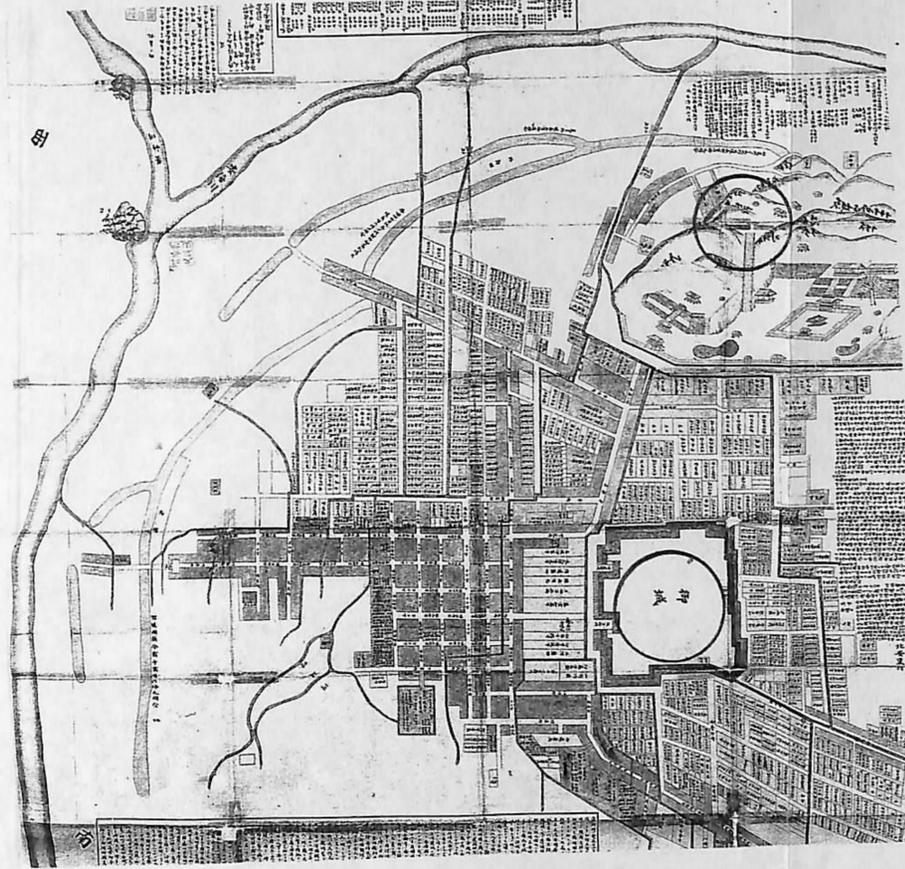
興国寺城 小島陣屋 駿府城

今川義元から徳川家康へ——駿府(静岡)城

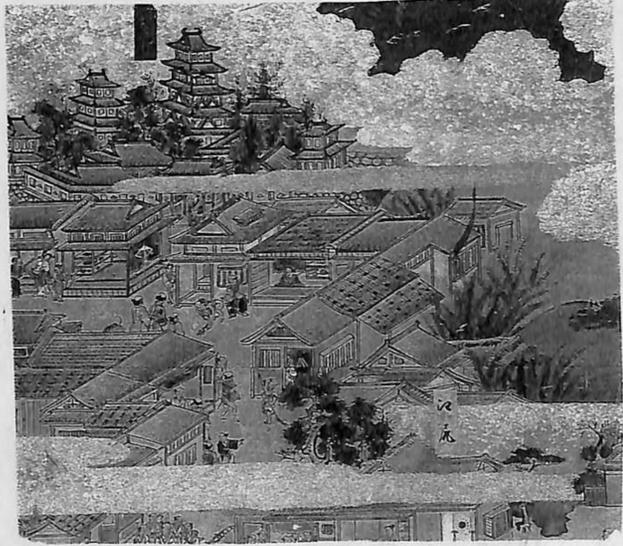
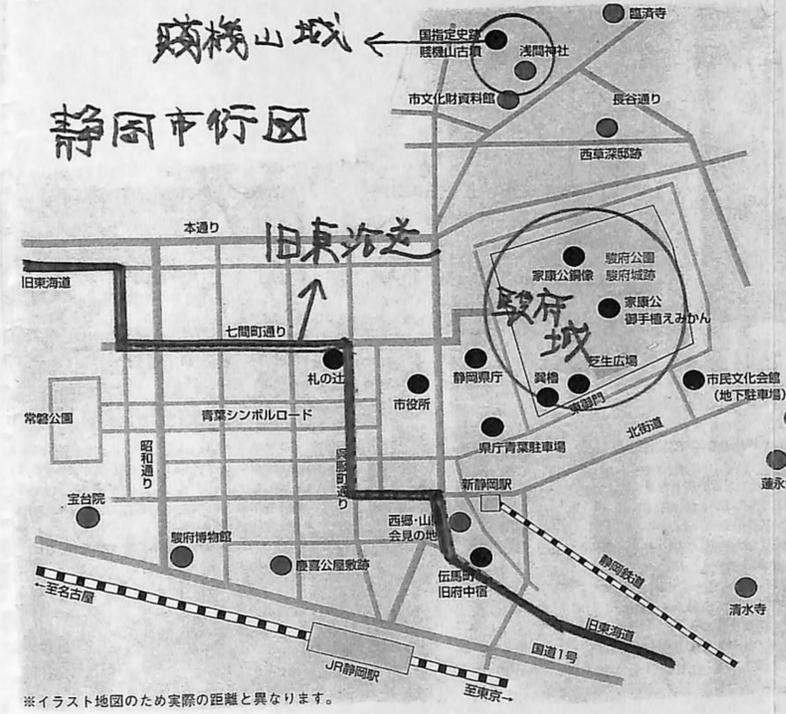
「静岡城(藩)」は明治2年の改称で、元は正式名称を「府中」城、通称を「駿府」城といった。徳川家16代を継承した家達移封の時、府中が不忠に通じるとして今川氏ゆかりの賤機山(しずはたや)にちなむ「静岡」を新地名に決めた。今川氏は源宗家八幡太郎義家の血を引く名門で鎌倉幕府創建に貢献した足利氏の分かれで三河今川荘(西尾市)に所領を与えられて苗字とした。3代頼国の時宗家の足利尊氏が挙兵、鎌倉北条氏と戦い引き続く後醍醐天皇の「建武の中興」に抵抗して室町幕府を成立させた。この戦いで一家を上げて尊氏に与した今川氏は頼国ら3兄弟が壮烈な討ち死にし、戦後の「論功行賞」で弟範国が駿河、遠江2か国の守護に補任された。7代氏親、8代氏輝、9代義元のころ戦国時代となる。今川氏は下克上の時代を守護大名から戦国大名へと変身、東海地方に一大勢力を築く。義元は武田信玄、北条氏康と同盟を結び、三河、尾張へと進出したが、永禄3年5月尾張桶狭間において織田信長に殺され衰退をはじめ。次の氏真が武田信玄と徳川家康に攻められ、永禄12年に滅亡した。

今川氏没落後、駿府は徳川家康の領国となる。家康にとっての駿府は幼少時今川義元の下で人質生活を送り、臨濟寺住職から学問を学んだ思い出の地でもあった。家康は義元居館跡に駿府城を築き、浜松から居城を移す。天正18年いったん豊臣秀吉によって関東に移封されたが、関が原の合戦の勝利で天下人となると諸大名を動員した「天下普請」で大改修を行なって自らの隠居城とした。家康の最期もこの駿府城、元和2年4月死去。75歳であった。

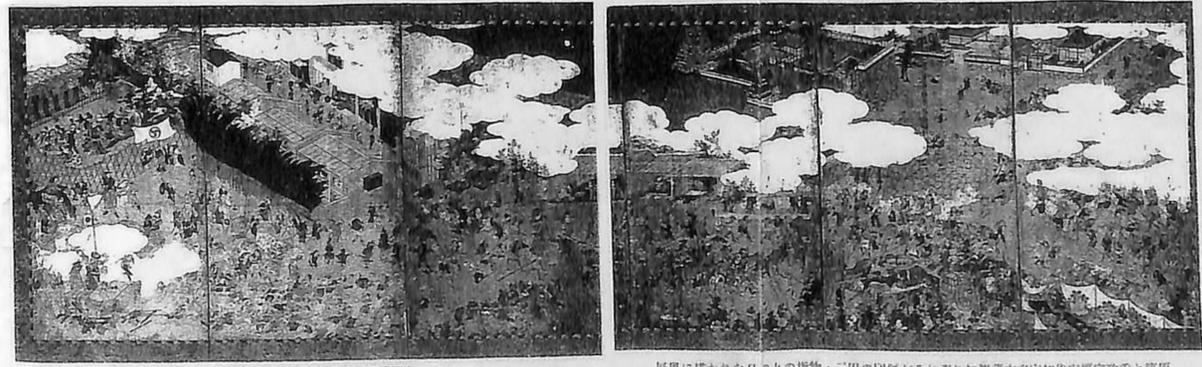
元和5年家康の子紀伊頼宣が入り、寛永2年2代将軍秀忠の2男忠直と代るが謀反の疑いで改易となる。以後駿府城は幕府直轄地として明治維新におよび、慶応4年16代家達が入って廃藩置県を迎える。明治29年から昭和の終戦まで旧城内に歩兵連隊が置かれ、本丸の天守台や石垣、堀などが破壊された。2の丸、3の丸堀と石垣が現存し、平成元年に巽櫓、平成8年に東御門が復元されている。



建武4年(1337)	初代今川範国、駿河国の守護に任ぜられる。(建武5年説もあり)
	●駿河国は、今川氏の領国となる。
天文18年(1549)	徳川家康、今川氏の人質として駿府で生活。(永禄3年まで)
天正14年(1586)	徳川家康、公式に駿府に入る。
天正17年(1589)	天守閣を始めとする二ノ丸までの駿府城完成。
慶長5年(1600)	関ヶ原の戦いで徳川方勝利。
慶長8年(1603)	徳川家康、征夷大将軍に任命され江戸幕府を開く。
慶長11年(1606)	●この頃より、駿府の町の町割や安倍川の治水工事を始める。家康は隠居城として新しい城の建設を川辺町付近に計画するが、従来の城を南・東・北に拡張することに變更。
慶長12年(1607)	駿府城本丸、二ノ丸の修築をはじめ。●本丸は完成するが12月に火出し、御殿を始め天守閣など本丸の全てを焼失する。直ちに再建にかかる。
慶長13年(1608)	本丸御殿等完成。
慶長15年(1610)	天守閣完成。
元和2年(1616)	徳川家康死去(75才)。久能山東照宮に埋葬される。
寛永12年(1635)	城下より出火、城内に延焼し天守閣・御殿・櫓・堀等大半を焼失。
寛永15年(1638)	御殿・櫓・城門等が再建されるが、天守閣は再建されず。
宝永4年(1707)	宝永大地震により駿府城の石垣等倒壊し、建物も1/3焼失。
宝永5年(1708)	駿府城の修築工事をを行う。
安政元年(1854)	安政の地震により駿府城内外の建物、石垣などはほぼ全壊する。
安政4年(1857)	修復工事を着手し、安政5年完了する。
明治2年(1869)	「駿河府中」を「静岡」と改称。
明治3年(1870)	二ノ丸冠木門払い下げ。以降明治9年までに大手門以下各城門が払い下げられ、取り壊される。
明治29年(1896)	駿府城跡を陸軍省に献納。
昭和24年(1949)	静岡市、駿府城跡の払い下げを受ける。
昭和26年(1951)	「駿府公園」と名称が決まる。
平成元年(1989)	復元巽櫓完成。
平成8年(1996)	復元二ノ丸東御門完成。



駿府城と府中城下



〔図1-13〕 駿府城絵図類 名古屋博物館蔵『駿府城図屏風』

屏風に描かれた白の丸の指物・三巴の附屬がそれぞれ加賀藩本多家初代安房守政重と臨風家の家紋であることで、両家が同時に助役した天下普請は慶長12年駿府城跡以外にない件が裏づけされ、本村風が駿府築城の屏風であることを確定している。

徳川家康大御所時代の居城・駿府城を歩く

1) はじめに——徳川家康が生涯の3分の1を送った駿府

①徳川家康(1542~1616)の生誕地は三河の岡崎だが、生涯でもっとも長く過ごしたのが駿府であった。

*今川氏の人質として過ごした少年時代の11年間

*駿河など5か国を領国支配した豊臣秀吉時代の4年間

*将軍を秀忠に譲って隠居した大御所時代の8年間

の3期で、家康全生涯74年間のおよそ3分の1にあたった。

②第1期=今川義元人質時代

幼くして織田信秀の捕われの身であった家康は、天文18年(1549)駿河守護職であった今川義元の人質として駿府に移り、8~19歳までの少年時代を過ごす。当時の居住地に諸説はあるが、臨濟寺の雪斎住職、華陽寺の智短和尚などに教育される。生涯におよぶ学問への深い造詣は駿府時代に形成されたものといえる。

*駿府城巽櫓で人質時代の臨濟寺「竹千代手習いの間」を見学する

③第2期=5か国を領有した豊臣秀吉時代

天正10年(1582)「天下布武」をめざした織田信長が本能寺に倒れたあと、北条氏と同盟を結んだ家康が駿河、遠江、三河、甲斐、信濃5か国の太守となる。14年豊臣秀吉の上洛要請を受け入れ、大阪城に表敬訪問して臣下の礼を取る。この年浜松から駿府に城を移す。第2期は45歳から49歳までの4年間。豊臣秀吉の小田原攻略に先鋒としてしたが関東移封となる。

④第3期=天下に号令した大御所時代

慶長5年関が原の合戦に勝利した家康は、8年江戸に幕府を開くが2年後に将軍職を3男秀忠に譲って隠居、12年駿府城を修築して江戸城から移る。第3期は66歳から没年まで。この間駿府から全国に号令、元和2年当地において逝去した。

関ヶ原の戦いに勝利した時点で、家康は実質的な諸大名の支配権を手に入れた。しかし、名目上は豊臣家の筆頭大老のままである。この主従関係をくつがえすには、家康が征夷大将軍になるしかない。征夷大将軍とは、もとは平安時代に蝦夷を征伐するために設けられた職だったが、源氏が平家を滅ぼして以来、武門の最高権力者の職名となっていた。ただし、この職を得るには「諸大名を統制する実力があり、源氏の家系であり、朝廷から官位をもらっている」という3つの条件を満たす必要がある。秀吉が、この職を渴望したがかなわなかったのは源姓ではなかったためである。さまたげは朝野を重ねた末、家康は1603年(慶長8年)、ついに朝廷から征夷大将軍に任じられた。これにより豊臣と徳川の主従関係は逆転し、家康の支配体制が名実ともに整ったのだ。

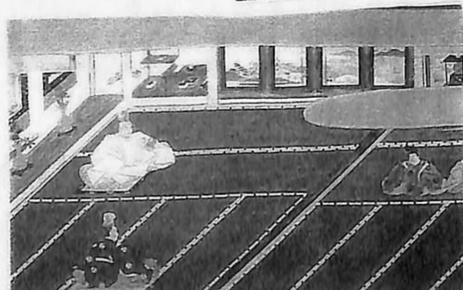
豊臣と徳川の関係逆転 家康ついに将軍となる



竹千代手習いの間



賤機山城



駿府城の御所



家康は当時の後陽成(ごようぜい)天皇によって征夷大将軍の職を任じられた。(個人蔵)

内大臣源朝臣
龍中辨藤原朝臣
宣権大納言藤原朝臣
勅件人直為征夷大将軍
者
慶長8年(1603)2月12日
朝臣から家康に下された、征夷大将軍宣旨。1603年(慶長8年)2月12日の日付が入っている。(日光東照宮蔵)

2) 前様(さきさま)の謹慎と文明開化——徳川慶喜と家達70万石

①徳川将軍家の最後も駿府(静岡)であった。15代慶喜は慶応4年(明治元年1868)4月恭順して江戸城を無血開城、宗家を継承した徳川家達に駿府70万石移封が命じられる。明治2年駿府を静岡と改称、明治4年に廃藩置県となった。

②慶喜は明治元年7月から翌2年9月まで静岡市内の宝台院において謹慎、許されて明治30年まで静岡で暮らした。「前様」「慶喜さん」の愛称で市民に親しまれ、カメラ、狩り、と網、弓、謡曲、絵画、書と多彩、当時珍しい自転車で外出して市民に「文明開化」を感じさせたという。

3) 東海道53次、第19宿「府中宿」の賑わい——静岡市街

①JR東海道線と国道1号線は旧東海道に並進している。

②旧東海道は静岡駅と駿府城のほぼ真ん中あたりを東西に走った。七間町通り、呉服町通り、伝馬町通りが旧街道で駿府城への往復で一瞬だが横切る。

③市街には慶喜謹慎地で家康の側室・西郷局の墓がある宝台院、慶喜屋敷跡、江戸開城の第1回交渉、西郷・山岡会見地などの史蹟がある。

4) 今川氏の詰め城を遠望——賤機山城と静岡浅間神社

①静岡浅間神社(せんげんさま)=神部(かんべ)、浅間(あさま)、大歳御祖(おおとしみおや)三社の総称。うち神部は駿河惣社、延喜式社で、いずれも創建不詳とされる。

②家康の入府以降、徳川家の崇敬が厚く将軍家祈願所として庇護された。

③境内に国指定重要文化財24棟、江戸後期幕府が10万両を投じて建造。極彩色装飾が絢爛と輝く。

④浅間造り拝殿、神部、浅間神社本殿、楼門など見どころ豊富だが今回は車中見学。

⑤背後の山が今川家詰め城の賤機山城。

今川氏は氏親のころ守護大名から戦国大名に転身、義元が武田信玄、北条氏康と組んで三河、尾張に進出したが永禄3年桶狭間で織田信長に殺された。その子氏真は駿府館を武田信玄に攻められ、逃げた掛川城で家康によって滅亡された。

⑥今川館の所在地は未詳。定説は駿府城だが屋形町とする考えもある。

⑦下見では賤機山城に登ったが本番は省略、山腹麓神社の先に本丸、2の丸、石塁、空堀などの遺構が残っている。



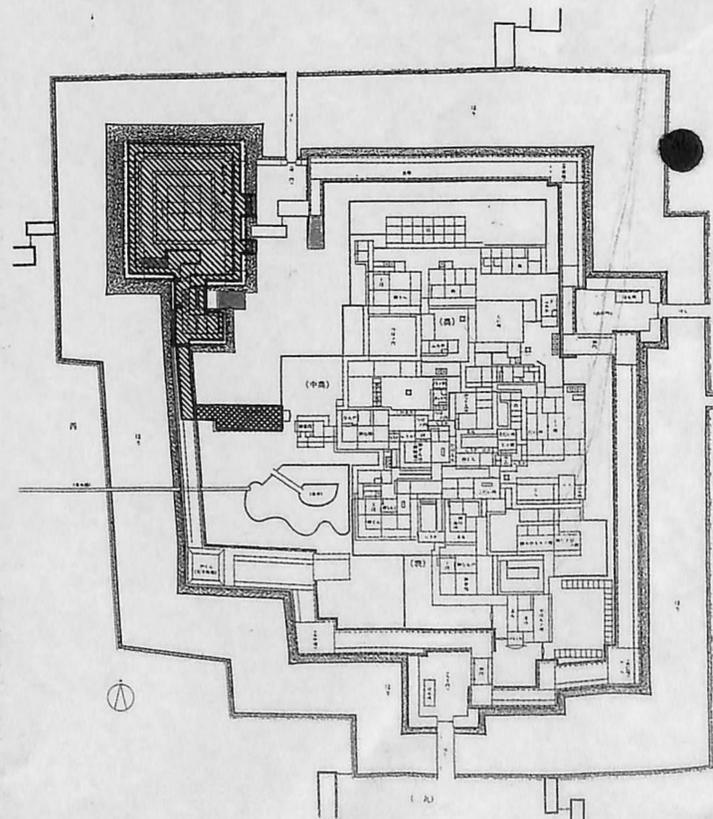
静岡浅間神社



駿府城絵図類:通信総合博物館「府中」(『東海道分間通称』)



広量の「東海道53次」府中



駿府城本丸図

5) 今川氏から徳川家康へ——駿府城の歩み 別掲「駿府城略年表」を参照

- ①前身は駿河守護職今川氏駿府館。今川氏を滅ぼした徳川家康が天正13年松平家忠に修復させたが5年後豊臣秀吉に江戸へ移された。慶長8年江戸に幕府を開いた家康は10年駿府を隠居地に定めて駿府城に戻る。この時家康は近畿地方の外様大名に命じて大修復を行なった。5重7階の巨大天守がそびえ、金銀を使った余りのきらびやかさに駿河湾の魚も寄りつかなくなったという伝説が生まれた。
- ②家康没後、10男徳川頼宣、秀忠2男忠長と徳川親族が相次いで封じられたが、忠長が謀反の疑いで取り潰されると駿府城は幕府直轄領となり城代が置かれた。城も度々の火災で焼失し、江戸末期にはたぬきや狐のすみかとなるほど荒れはてていたという。
- ③明治維新で徳川家達を迎えるが明治4年に廃藩置県となり6年に廃城、城門や建物が売却撤去された。明治29年から昭和戦前にかけて陸軍連隊が使用して本丸堀を埋め立て、戦後の昭和24年払い下げられ「駿府公園」として一般開放された。
- ④平成元年から発掘調査結果にもとづく復元工事を開始、巽櫓、2の丸東御門が相次いで完成している。

6) 三重水濠に囲まれた輪郭式縄張り——駿府城主郭跡の駿府公園に入る

- ①静岡浅間神社から5分ほどで駿府城外堀に到着、バスはからめ手の草深御門から公園内に入る。
- ②外堀(3の丸水濠)、石垣=輪郭式3重水濠の外周で、東側と東南角地部分を除く3分の2が現存している。1辺およそ800mのほぼ正方形で、濠幅がおおよそ50m、微妙な屈曲、折りひずみがある。
- ③濠の内側は3の丸。家康大御所時代の増設で本多正純、成瀬正成、安藤直次、松平正綱ら新参譜代、近習出頭人と呼ばれた役人たちが居住した。後期は城代屋敷や定番屋敷、明治以降は陸軍兵舎で、現在は官庁や学校街になっている。大手側は県庁舎や法務局合同庁舎、中央保健所、地方裁判所、税務署など。車窓から中央体育館、城内小学校がみえる。
- ③草深御門=3の丸のからめ手門。「不明(あかず)門」といい、普段は門を閉じ非常時の脱出用とした。道路の改変で大きく形が変わったが本来は内枳形で明治維新後に撤去された。
- ④中堀(2の丸水濠)、石垣、北御門=3の丸と2の丸を分ける堀と城門。元は枳形、渡り櫓門で、いまは普通の土橋になっている。
- ⑤駿府公園内の臨時駐車場で降車。北御門周辺の土塁上から2の丸、本丸跡を俯瞰、徳川忠長時代絵図によれば駐車場付近は塩硝蔵(火薬庫)で、2の丸はほかに御殿台所、西の丸、米蔵などであった。

7) 家康の大御所居城御門を復元——2の丸東御門と巽櫓に入館

- ①時間の都合で先に2の丸東御門と巽櫓に回る。入館は16時00分まで、16時30分に閉館となる。内部は自由見学、集合時間厳守。現地では委託
- ②城内唯一の復元御門、2の丸中堀の虎口で、構成は橋台、土橋、高麗門、枳形、多聞櫓、櫓門から成る。内枳形右折れ、江戸城と同じ造りで切り込みハギ、メジを通した石組みは幕府「天下普請」の象徴でもある。
- ③巽櫓=平成元年の復元。現存する図面を基に正確に復元したという。内部の博物館をめぐる。発掘調査で出土した青銅製のシャチ、駿府城模型、天守模型、臨濟寺の家康勉強部屋を復元した「竹千代手習いの間」などにも注目したい。

8) 軍隊に埋め込まれた家康の内堀——発掘された本丸水濠と本丸

- ①発掘調査で検出され整備された本丸堀の一部。本丸堀の埋め立てで本丸と2の丸が1つの敷地となったため広大に感じられるが本来の2の丸と本丸は決して広い郭ではなかった。本丸跡は公園となったため見るべき遺構は少ない。天守跡碑、本丸跡碑、家康像、県指定天然記念物の「手植えみかん」を回る。
- ②家康大御所時代の本丸御殿=本丸は東西120間、南北136間の本丸堀に囲まれた家康の居住区で面積4haを測る。本丸大手門を南面やや東よりに配し、そこから天守のある西北隅へ雁行して本丸御殿を連ねた。その構成は玄関、遠侍、広間を中心とした表向き、家康の生活空間中奥の御座所は対面所、御寝間はやや小さく、池泉中の島を配した寝殿風庭園をしつらえた。奥御殿は側室と子女たちが生活、お亀、お万の方がお側にしたがった。家康御座所は白蟻葺き、他はすべて瓦葺きで仕上げられ狩野一類と長谷川法眼が極彩色の障壁画を描いた。

*本丸水濠解説看板=本丸堀

本丸堀は駿府城の三重堀の一番内側の堀で本丸を取り囲んでいます。幅約23~30mで深さは江戸時代には約5mありました。石垣は荒削りした石を積み上げ、隙間に小さな石を詰めていく「打ち込みハギ」と呼ばれる積み方です。角の部分は「算木積み」という積み方で横長の石を互い違いに積んで崩れにくくしています。発掘調査によって姿を現した本丸堀は江戸時代の雰囲気を感じられる貴重な遺構です。

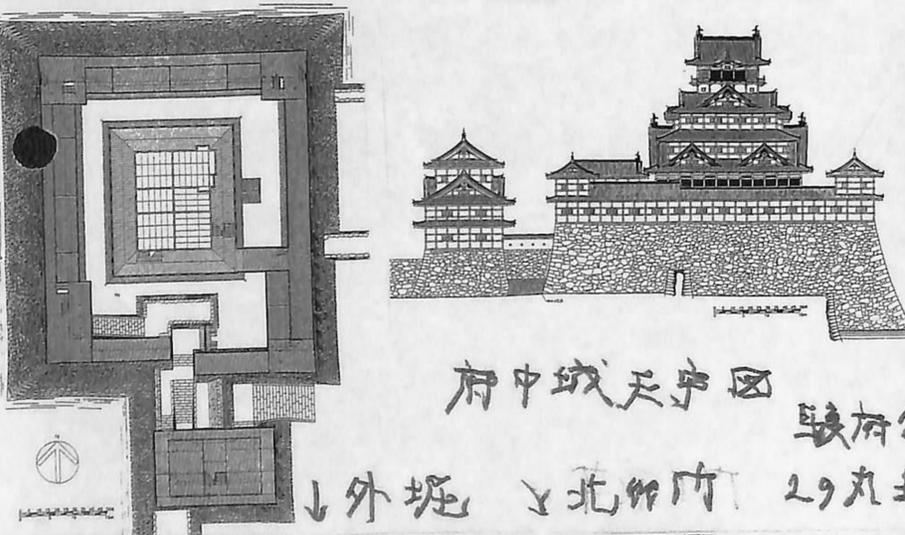
*駿府城説明看板=駿府城

*家康遺訓碑=東照公御遺徳

人の一生は重荷を負いて遠き道を歩くがごとし、いそぐべからず不自由を常と思えば不足なし、心に望みおこらば困窮したる時を思いだすべし。堪忍は無事長久の元、怒るは敵と思え、勝つことばかり知りて負けることを知らざれば害その身に至る、己れを責めて人を責めるな、およぼざるは過ぎたるよりまされり。

*手植えみかん看板=静岡県指定天然記念物、家康手上的ミカン

徳川家康公が將軍職を退いて駿府城に隠居のおり紀州より献上された鉢植えのミカンを天守閣下の本丸に移植したものと伝えられている。



本丸水濠



東御門と巽櫓



手植えみかん



本丸跡と家康像



③「天下の格」を意識した連立式5重7階天守=家康は慶長12年、15年の2度にわたって巨大天守を構築、「当代記」「慶長日記」などによると単独式天守（還郭式とする説もある）

層塔型5重7階天守（徳川時代石垣技術の発展で可能となった五重塔型、等減式天守）

- 1重1階=10間（70尺）×12間（84尺）石段、元段、落縁
 - 2階=1階と同平面 4面に欄干（回り縁?）
 - 3階=〃 腰屋根瓦、欄干
 - 2重4階=8間（56尺）×10間（70尺）腰屋根、破風
 - 3重5階=6間（42尺）×8間（56尺）〃 唐破風
 - 4重6階=5間（35尺）×6間（42尺）屋根、破風
 - 5重7階=4間（28尺）×5間（35尺）物見の段、天井組み入れ、屋根、破風、しゃち
- 特徴=①破風を多用している、②2階に回り縁を回す、

③1間7尺（通常6.5尺）、天皇居所にならない、江戸、名古屋、二条、大阪城と同じ天下の格意識

*天守跡解説看板=駿府白天守閣跡

大御所徳川家康の居城にふさわしく駿府城の本丸には五層七階の壮麗な天守閣が築かれました。天守閣は駿府城のシンボルとして城下町からは富士山とならび立って見えたと言われます。（中略）天守閣は1595年に一度火災に会い再建されますが家康没後の寛永12年に再び火災により焼失し、以後再建されませんでした。わずかに天守の面影を残す石垣造りの天守台も明治29年に静岡連隊を誘致するにあたって解体され埋められました。

9) 清水港と結んだ水路——2の丸水路

- ①発掘調査で確認、整備公開された水路。家康は清水湊を駿府の外港とし、巴川を遡って城の運河に入り、直接城内に荷揚げさせた。
- ②水路は4回屈曲して中堀と内堀を結び、接続部分は2mほどの段差を作って本丸堀の水位を一定に保つ工夫がされていた。
- ③紅葉山庭園を遠望=家康時代の2の丸御殿、御台所跡。現在は紅葉山庭園になっている。有料公開されているが今回は省略。

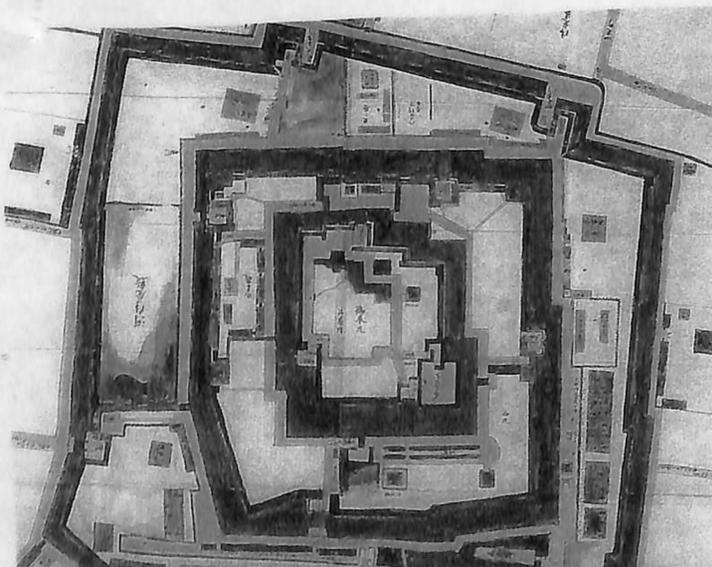
10) 最後に東御門をくぐってバスに戻る

①復元櫓門、枅形、頑強な造りと守りを体感する。

*東御門開設看板=東御門

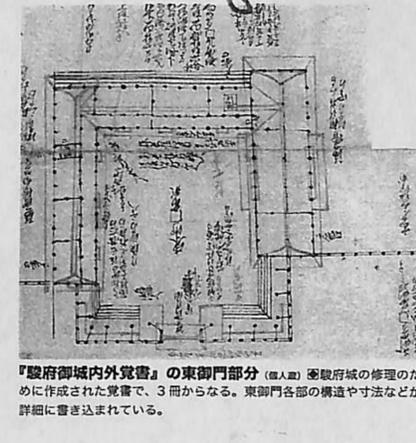
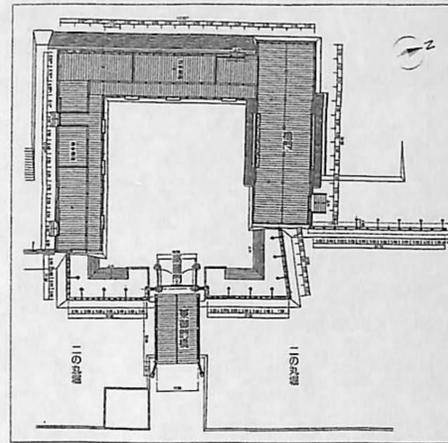
東御門は駿府城2の丸に位置する主要な出入り口でした。この門は2の丸堀にかかる東御門橋と高麗門、櫓門、南、西の多聞櫓で構成される枅形門です。（中略）主な重臣たちの出入り口として無用されました。東御門は寛永12年に天守閣、御殿、巽櫓などとともに焼失し、同15年に再建されました。復元工事はこの寛永年間の再建時の姿をめざし復元したものです

②2の丸橋から東御門、巽櫓を見上げるながらバス乗車、一路新宿をめざす。

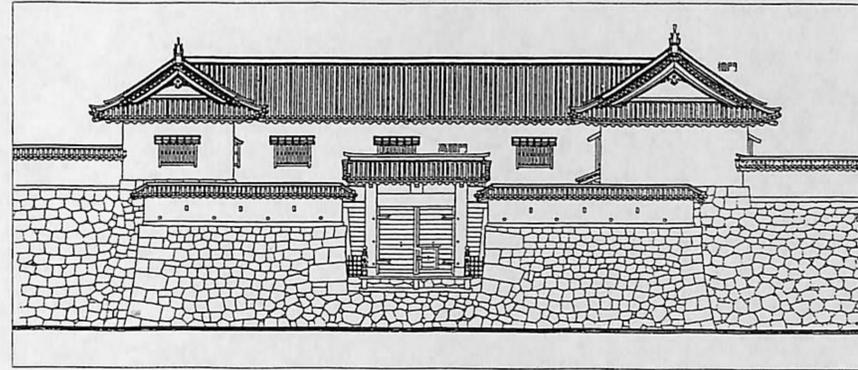


以上
2の丸水路
巽櫓と東御門

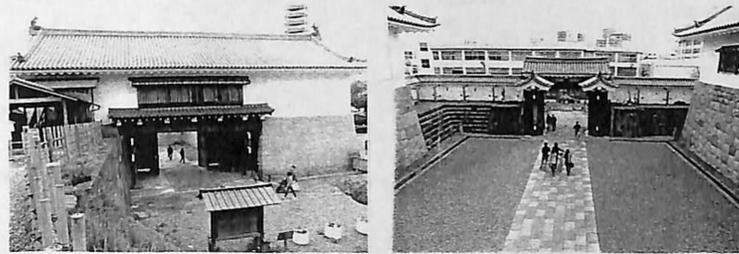
←駿府城絵図



『駿府御城内外覚書』の東御門部分（個人蔵）駿府城の修理のために作成された覚書で、3冊からなる。東御門各部の構造や寸法などが詳細に書き込まれている。



東御門平面図(上)・東面立面図(下) (静岡市教育委員会提供) 東面が東御門枅形の正面にあたる。



復元された東御門

駿府城二の丸東御門の復元は、駿府城の二の丸と本丸部分を占める駿府公園の再整備計画の一環として、二の丸東御門の復元に着手された。この再整備計画では、駿府公園を歴史的な雰囲気を取り入れた公園とするため、東御門の復元を進めるが、駿府城は復元に使用できるような歴史的資料は非常に少ない。特に、徳川家康在城期のもので、本丸御殿以外ほとんど存在していない。幸運にも、巽櫓の復元直前の時点で、市内の個人宅より、寛永の再建以降とは思われるが、「駿府御城惣指図」と呼ばれる詳細な指図と、「駿府御城内外覚書」とされる文書が見つかった。特に、「駿府御城内外覚書」は、宝暦年間（一七五一〜一七六四）ごろの修理記録で、文章による記録は修理の経過にとどまらず、当時の消耗品や日常雑貨品の値段など詳細を記している。建物部分には、櫓や門が墨書きされ、屋根は朱書きされるなど非常に史料価値の高いものであったため、これらの資料を使い復元を進めることとなった。そうした経緯があり、復元された東御門は、寛永期以降の状況となっている。

復元のための貴重な資料

東御門は二の丸東御門の門である。駿府城は第二次大戦終了までは歩兵第三四連隊の駐屯地となり、東御門はこの正面入り口として使われていた。特に東御門枅形の西側の石垣は、地上部分がすべて除去されていたために、枅形の正確な位置確認の発掘調査から行われることとなった。発掘調査により、東御門石垣の根石部分が検出された。その結果、枅形の内側から櫓門にかけては石垣であるが、枅形外の西側は、雁木（石段）となっており、櫓門の復元がめざされた。枅形の北側や南側の現存する石垣は、いわゆる切込ハギにより積まれているが、地下に埋まっている部分は打込ハギであることも解り、家康築城当初の枅形の石垣は、打込ハギにより積まれていることが検証された。さらに、櫓門部分には、根石の下に脚木が検出された。脚木は平行に二本の角材が並べられ、掘れ止めの杭も打たれているなど駿府城の石垣構造を知る重要な手がかりとなっている。建物については、これら発掘調査に加え、「駿府御城内外覚書」の記述による、欠かすことのできない資料であり、設計に活かされている。

発掘調査

枅形の石垣と門の復元 石垣の復元にあたっては、寛永期以降という設定もあり、周辺の現存する石垣との調和なども考え、切込ハギにより積まれている。駿府城の石垣の石材は、家康築城当初は静岡市内を流れる齋川や長尾川の土流部から産出される砂岩や礫岩、焼津市にかけて産出する大崩海岸から浜当日にかけて産出する火山礫凝灰岩などが中心で、後の積み直しの時点では伊豆の安山岩も使われている。しかし、現在いずれの場所も採石は行われていないため、今回の復元では、佐久石や蔵王石が使われている。建物に使われた木材は、総量の約六割は県内産のものを使用しているが、櫓門の冠木などの大型品には台湾産も使われている。また、加工にあたっては、梁材などは手斧仕上げで施工されている。さらに、左官工事では、建物の外壁・内壁ともに古来の土蔵建築と同じ工法により仕上げられている。駿府城東御門の大きな特徴として、青銅製の鯨がある。今回の復元では、昭和四十四年（一九六九）に東御門脇の二の丸堀から発見された青銅製の鯨を参考に、銅製物で製作され、屋根の上に掲げられた。東御門は、幕末の安政大地震後は再建されず、櫓門部分に冠木門風の建物



↑復元前
←発掘作業
↓工事



門を復元する
駿府城東御門
実際内部

駿府城二の丸 東御門 巽櫓
13.3.26 大人
東御門・巽櫓 入場券
No. 37600 大人 200円